スラーム関係）や人名がこの人々への接近を阻んできたこともあろう。読者の理解を助けるためには，用語リストや人名リストがあった方が親切であったろう。

なお，本書は第17回東南アジア史学会賞（2019年）の受賞対象となったことを付記しておく。

（小林寧子・南山大学アジア・太平洋研究センター客員研究員）

参考文献

アンダーソン，ベネディクト．2007.『定本想像の共同体――ナショナリズムの起源と流行』白石隆；白石さや（訳）．書籍工房早山．（原著 Anderson, Benedict. 2006. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. Revised ed. London and New York: Verso.）

Mobini-Kesheh, Natalie. 1999. *The Hadrami Awakening: Community and Identity in the Netherlands East Indies, 1900–1942*. Ithaca: Cornell Southeast Asian Program Publications.

富永泰代．『小さな学校――カルティニによるオランダ語書簡集研究』京都大学学術出版会，2019，iv+389p.

本書は，インドネシアが蘭領東インドと呼ばれた時代のジャワ島に生きた一人のジャワ人女性カルティニについて，富永泰代が1987年に出した論考以来の研究をまとめ上げた渾身の書と言える。「あとがき」にはカルティニ生誕140年を記念して彼女の誕生日4月21日に刊行されると書かれている。そこには著者のカルティニに対する深い思いが感じられる。研究はもちろん客観的に行われるものではあるが，研究者は研究対象に心惹かれ，愛着を持って資料を求めて調査を行い，資料と対話しながら解釈や分析を行うことで，素晴らしい研究成果を生む出すことができるのではないだろうか。本書は，時には抑えきれないカルティニに寄せる想いの迸りさえ感じられ，著者の研究テーマに対する愛着が行間から読み取れる。研究書であるとともに読書の楽しみを感じさせてくれる一冊となっている。その一方で，著者の主張と自説が展開される時に，その思いがやや強く出ている記述があることも否めない。それを研究者のスタイルと呼ぶのであれば，読者の好みが分かれるのは致し方ない。

著者はカルティニについて30年にも及ぶ長期にわたり資料を渉猟し，インドネシアとオランダで調査を行った上で，カルティニが書いたオランダ語の書簡を丁寧に読み込み研究をまとめている。研究の転機となったのは，1987年に編集・出版されたカルティニの全書簡集［Kartini 1987］であった。その書簡集と蘭領東インド時代の1911年にカルティニをよく知り文通相手でもあった当時の教育長官アベンダノンが編集し出版した書簡集との綿密な比較研究は著者によって博士論文として2011年にまとめられている。

本書を構成している全5章は概ねこれまでの著者の研究論文，特に博士論文を基礎としている。序章の第3節「本書の構成」（pp. 24–25）に明瞭に書かれているように，前半の第1章から第3章ではカルティニが生きた時代のジャワ社会とカルティニの「世界認識」（「　」は著者による）を，カルティニが受けた教育と読書を中心にして描き出している。特に第3章はカルティニの読書リストを手掛かりとして，カルティニという一人の人物の内面と世界観を描き出しており非常に興味深い章となっている。第4章と第5章では全書簡集が出版されて初めて明らかになったカルティニの社会活動や政策提言，特にカルティニが力を注いだ木彫工芸振興活動，伝統社会での女性の地位，教育に関する考え方を中心に論じている。従来の研究ではオランダの倫理政策の文脈の中にカルティニは位置付けられ，1911年版の編集者であるアベンダノンを中心としてオランダ人によって与えられた「近代精神」を体現する「原住民」としての役割を演じさせられてきたとして，それらを批判的に論じる。さらには，カルティニが良妻賢母，民族主義の先駆者，フェミニズムの先駆者，教育家として語られていく言説がどのようにして生み出されていったのか，貴族の名前である「ラデン・アジュン・カルティニ」という呼称を手掛

かりに解き明かしていく。ここから本書が目指すのは，「オランダの倫理政策の文脈によるカルティニ表象の修正を図り，さらに，『インドネシア民族主義の先駆者』に回収されない新たなカルティニ像を提示する」（p. 25）ことである。

その本書の目的に沿って，カルティニ言説が時代の要請に合わせて都合の良いように使われてきたことを，カルティニのすべての書簡を丁寧に分析することによって指摘しようとする。アベンダノンらによる女子校設立運動を円滑に進めるための宗主国オランダに忠実なジャワ人として，あるいは民族の母（後に独立英雄に列せられた）としてカルティニ言説は使われたと著者は論じる。本書による徹底した書簡研究は，従来のカルティニ研究を超える丁寧な傍証資料に補完され一つの完成に達していると言える。本書の目論見は概ね成功していると言えるが，留意しなければならないのは著者が副題で自ら断っているように，この研究はあくまでカルティニのオランダ語書簡という資料の解釈から描き出された一つのカルティニ像であることである。例えば，小林寧子が著者の博士論文の研究成果を含めて様々な資料を有機的に使って21世紀の今日までの歴史の中でカルティニを再評価しカルティニ像を描き出したものとは異なる［小林 2018］。また，欲を言えばKITLV（オランダ王立言語地理民族研究所）所蔵のアーカイブズ（No. 897）以外にも，個人のものであれ団体や組織あるいは東インド政府のものであれ，ハーグとジャカルタの公文書館に保管されているアーカイブズを資料として使うことができていれば，より多くの発見が得られたかもしれない。植民地時代のインドネシアで，オランダ人と親交や関係があったインドネシア人についての記録は，大抵は政府の報告書に現れる。それらの記録は時には各種の政府刊行物（verslag）に登場することさえあるが，本書ではそれらは資料として使われていないようである。一方で，当時のオランダ語の新聞や雑誌が傍証資料として使われているのは注目に値する。

著者が参考文献の「その他」として挙げている上記のKITLV所蔵のアーカイブズであるが，評者が調べたところ，現在はライデン大学図書館に移管されている。歴史ある研究所のKITLV自体は今なお研究機関として活動を続けているが，その図書資料，写真資料，アーカイブズ資料からなる全てのコレクションは2017年3月にライデン大学図書館内にAsian Libraryが設置されたのを機に移管されている。同図書館のカタログでCollectie Kartiniを検索してみると，特別コレクションとして保存されているアーカイブズだけでも414点がヒットし，本書で使われているこの資料も「D H 897-23」のように枝番が振られて所蔵されている。また写真はライデン大学図書館デジタル・レポジトリの中で171枚がヒットし，カルティニの写真はもとより，カルティニが描いたと思われる白鳥の絵や彼女が作成したと考えられるろうけつ染めの布などの写真も含まれていることがわかり，カルティニに関する資料の膨大さに圧倒される。それは当時いかにオランダ人がカルティニに興味を示したかを物語るものであり，著者が指摘する「虚像」が創造されていったことを暗示しているとも言える。

本書の序章で著者は1911年版の書簡集はアベンダノンの「ラデン・アジュン・カルティニ物語」であると断じ（p. 23），著者の問題意識がはっきりと打ち出されている。しかし，そもそも編集するということは編集者の目的や意図があって行われるものであり，「恣意性」という言葉はやや強い言葉のように感じられる。著者が指摘するように確かにアベンダノンが編集した書簡集によってカルティニ像が創造されたという側面もあるが，それはアベンダノンが意図していた方向へ進んだかどうかはわからない。最終的には書簡集によってカルティニ像が一人歩きしたのである。1911年版の書簡集と1987年の全書簡集との共通する部分をイタリックにして可視化を試みているのは大変便利で興味深いのだが，新たに訳出し引用した書簡の中に「中略」があるのは，読者としてはもどかしい。例えば，一夫多妻制についてカルティニが嘆く書簡の一部（p. 223; ［Kartini 1987: 90］）を原文と照らし合わせてみると，著者が省略している部分はさほど長いわけではなく「中略」とした意図がはっきりしない。他の書簡については紙幅の制限があったのかもしれないが，その都度オランダ語

（誰もが読めるわけではない）の書簡集に当たらなければならないのが不便であるだけでなく，編集されて削除されたカルティニの言葉を詳らかにするという本書の問題関心がぼやけてしまう。1987年の全書簡集の中に収められている書簡をいくつか読んでみると，直接的な筆致でカルティニの自由な考えや思い，感情が綴られている書簡もあり，著者が指摘するように全書簡集の出版によって初めて生身のカルティニの声が聞こえるようになったことがわかる。一方で，それは私信である書簡が公開されたということであり，カルティニをよく知るアベンダノンが取捨選択し，時には「切り貼り」して書簡集を出版した理由の一つでもあるのだろう。それゆえに*Door Duisternis tot Licht*（直訳は「闇を通って光へ至る」）（p. 3脚注）と題された1911年版は，いみじくも著者が指摘するように史資料ではなく「物語」として読むべきなのである。

本書ではカルティニについての先行研究が丁寧に調べられているが，1987年の全書簡が出版された後の研究に言及している中で，コーテ（J. Cote）の一連の研究成果を「筆者が批判の対象とするインドネシア民族主義の中に位置付けられたカルティニ研究に関する叙述を，超えるものではない」（p. 23）と簡単に片付けてしまっているのは，コーテの研究の方法論が著者のものと近いこともあるだけにもう少し詳細に紹介し，研究の観点の違いが述べられていると本書の意義がより明確になったのではないか。もう一点，本書の題である「小さな学校」について，どういう意図でこの題としたのか「結語」（p. 351）の中でやっと説明されるが，その題に込められた意味の説明が原文とともに冒頭でされる方が読者には親切だったと思われる。

英語ではカルティニの書簡集の全訳がコーテによって出版されているが，未だ邦訳は出版されておらず，著者の手による日本語版の出版が望まれる。

最後に本書の構成を紹介しておく。

序　章　*Door Duisternis tot Licht* と *Brieven*
第1章　背景――閉されたジャワ社会の下で
第2章　カルティニの生涯
第3章　カルティニの読書
第4章　カルティニの社会活動――ジュパラの木彫工芸振興活動
第5章　失われたカルティニの声を求めて――カルティニの理想と現実
第6章　「光と闇」をめぐって――1911年版書名と編集の考察
結　語

カルティニの全書簡を再解釈することにより，著者は「カルティニは相異なる文化価値の仲介者であり，従来から言われる単なるオランダ語による仲介者とは全く異なる。同時に，カルティニは貧困を社会の問題と捉え，社会的に弱い立場にある人々に寄り添いその声を代弁した」（p. 349）と結論づけている。書簡から聞こえるカルティニの心の声に耳を傾けて書かれた本書は，著者が師と仰ぐ土屋健治が28年前に『カルティニの風景』［土屋 1991］で描き出したカルティニの心象風景をより広げることに貢献するものとなっている。

（森山幹弘・南山大学国際教養学部）

参考文献

Kartini. 1987. *Brieven aan mevrouw R.M. Abendanon-Mandri en haar echtgenoot met andere documenten*, compiled by F. G. P. Jaquet. Dordrecht; Providence: Foris Publications.

小林寧子．2018．「国家・英雄・ジェンダー――カルティニ像の変遷」『歴史の生成――叙述と沈黙のヒストリオグラフィ』小泉順子（編），23–73ページ所収．京都：京都大学学術出版会．

土屋健治．1991．『カルティニの風景』東京：めこん．

細田尚美．『幸運を探すフィリピンの移民たち――冒険・犠牲・祝福の民族誌』明石書店，2019，395p.

著者のフィールドワークは，2000年から2017年までの間にフィリピン・サマール州カルバヨグ市